

協力会だより

第35号

発行 山梨県立考古博物館協会 〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923
平成22年7月31日発行 電話(055)266-3881(考古博物館内) <http://www.y-kyouryokukai.jp/>

東日本最大の前方後円墳を見る！—甲斐銚子塚古墳より大きな前方後円墳—

平成21年度県外研修 群馬県 国指定史跡太田天神山古墳と群馬県立歴史博物館



【写真】左上・右上：天神山古墳見学風景、左下：群馬県立歴史博物館、右下：参加者集合写真

研修コース 考古博物館→天神山古墳(女体山古墳など)→群馬県立歴史博物館→考古博物館

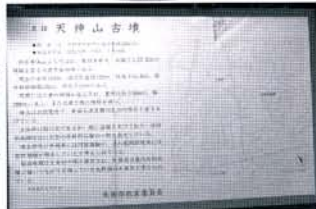
平成21年度県外研修は、甲斐銚子塚古墳(全長169m)より大きい古墳を見るということで、今回は東日本最大(全長210m)の前方後円墳太田天神山古墳(国指定史跡、群馬県太田市)と群馬県立歴史博物館(高崎市)を協力員32名、事務局員4名の計36名で訪ねました。

平成21年7月4日土曜日の朝8時半に考古博物館を貸し切りバスで出発。中央道、圏央道、関越道、北関東自動車道路と進み、お昼前に群馬県太田市に到着。まずは昼食を旬菜茶房「美川」でいただきました。お店からは、こんもりとした森がすぐそばに見え、それが太田天神山古墳でした。昼食後、歩いて古墳へ向かいました。現地は観光地のように整備はされていませんが、敷地内はきれいに草刈りされており保坂課長の案内のもと墳丘へも登って見学することができました。近くにある国指定史跡女体山古墳(帆立貝式古墳)や陪塚も見て歩きました。1時間ほどの見学の後、再び、バスに乗り高崎市の群馬の森公園内にある県立歴史博物館へ向かいました。そこでその日から始まった開館30周年記念展「国宝 武人ハニワ、群馬へ帰る！～これが最後、東と西の埴輪大集合～」(一部県立近代美術館でも展示)を学芸員の杉山さんの丁寧なお案内で1時間ほど観覧しました。その後帰路に就き、5時40分無事考古博物館へ到着しました。

見学地での滞在時間が少なく、じっくりと見学できなかった点もありましたが、天神山古墳では東日本最大の大きさを体感、博物館では国宝の武人埴輪をはじめ、山梨県では見ることのできない数々の埴輪を見ることができ、山梨の古墳時代を考える上でこの研修は価値のあるものとなりました。

平成21年度 山梨県立考古博物館協力会 ～ 県外研修 ～

天神山古墳・女体山古墳
群馬県立歴史博物館
平成21年7月4日(土)



写真撮影・作製 協力員 高野 和正

～県外研修記～

協力員 岡庭 邦子

なかなか個人では行く機会のない、太田天神山古墳、大きかったです。堀があったり埴輪があったりつくられた当時はどんな古墳だったのでしょうか。どの位の人数でどんなふうにつくっていったのでしょうか。できることならその様子を見てみたいものです。

群馬県立歴史博物館もちょうど特別展があり、埴輪もたくさん展示されていて、もう少し見学の時間があればいいなと思いました。私は多少帰りが遅くなくても集合時間が早くなってもかまわないので、もう少し時間が取れるといいと思いました。昼食もおいしくいただき楽しい有意義な一日でした。

「天神山古墳」と「群馬県立歴史博物館」見学研修の感想 協力員 亀山 恵之助

男体山と呼ばれる東日本最大の前方後円墳の現地研修に参加した。目の当たりを見るとさすが大きい。全長210m、5世紀中頃につくられたというこの古墳、広々とした周囲を考えたり、説明を聞いたり、見たり、確かめたりして学んだ。

開館30周年の博物館で東と西の埴輪の集合企画展を興味深く見学できた。私は人物埴輪、動物・器材埴輪の展示物のひとつひとつをみて、当時の精神文化を感じたり、考えさせられたりした。表現力のすばらしさ、美しさに心ひかれ、いつまでもみとれてしまった。飽きのこない埴輪であった。また、馬に乗る盛装の男、武人埴輪、大刀を持つ巫女、高床入母屋造の家形埴輪など素晴らしかった。私も表現豊かな均整のとれた人物埴輪を作陶したくなった。

おわりに研修の機会をあたえて下さった関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。次の協力会の研修が楽しみです。

群馬研修旅行を通して感じたこと～山梨の未来の考古学者のために～

協力員 杉野 美幸

学び問う「学問」は、生涯を通じてなされることが理想だとは思いますが、とりわけこれから生きる若い人たちのものだと思うのです。しかし、考古学となるとなんとなく高尚で「男性的」というか、大人のストイックな雰囲気がありました。もっと民俗学的なやわらかいアプローチの仕方があれば、楽しく親しみやすいのではないだろうか、などとボンヤリ考えているうちに群馬県への研修旅行を迎えました。

4歳と1歳の母親として、現在子育てで真最中！にもかかわらず、協力会への入会を決めたのは、いまこそ、縄文や先史のダイナミズムが必要だと感じたからです。活動の時間だけは朝6時に実家へ預け、ボランティアの活動を通じて、子育てしている自分を客観視し、場を活かして歴史の勉強をすることにしました。日常の生活でも「縄文の生活」に触れている機会を増やしていくうちに、こどもたちは縄文へのアプローチが大好きになりました。

こどもたちは本当にダイナミックです。エネルギーを使いきることにかけては天才です。駆け回り、どんぐりや木の実を拾い、土をつかみ粘土をこねまわして様々なモノをつくり、墳丘墓を散策しながらいろいろとその場で創り上げた物語を聞かせてくれ、昔の人の生活にもみずみずしい反応を示してくれます。就学前までの年代は、文化を学びながらもまだ染まることのない創造性に満ち溢れていて、まさに縄文人が一番近い感覚を持っているのではないのでしょうか。山梨はすばらしい博物館や史跡が残っているのですから、こういった積み重ねをもっと共有できるはずだと感じました。山梨は縄文時代の遺跡もさることながら博物館も各所すばらしい施設を有しているので、より多くの子育て中の家庭にも興味を持ってもらいたいと思います。その為にはどうすればよいか???

群馬県の考古博物館は想像と違って、家族連れや子供の姿が多いので驚きました。展示内容も実にわかりやすく、古代の衣装の体験や、埴輪もテーマ軸を設けて比較できるよう年代別に並べられていたり、古墳に見立てたパネルを背景に再現されていたりと、視覚的に訴えるものがありました。また、子供向けのシートが様々なところに設置され、まるで宝物探しのようにワクワクしました。さらに発展的な内容のワークシートが筆記具付100円で販売されていました。協力員の先輩方の質問の専門的なことにも驚かされましたが、解説をしてくださる学芸員の方の説明は実にわかりやすく、初心者に対する配慮も感じられました。

全国的に有名な武人埴輪を初めとして技術の高さに改めて驚きました。粘土などの造形物は大きくなればなるほど扱いが難しいものですが、当時の技術水準の高さに職業的なものを感じました。圧倒するような展示だけでなく、子供でも楽しめる「群馬」らしい「馬」埴輪を集めた展示などは、群馬県の教育への

情熱を感じます。好きな人が楽しむものではなく、誰もが楽しめる考古学を目指している雰囲気随所にうかがえ、楽しい時間となりました。

アプローチの仕方、展示解説の仕方、親しみやすい雰囲気…協力員として学ぶところは大きかったです。まずは自分がおおいに楽しんで勉強し、より多くの人に「伝えて」いきたいと思います。博物館の裏側事情を知ることにより、より多くの展示形態についても勉強し県に対して積極的に提言する姿勢も大切だと痛感しました。我が県立考古博物館は職員の方々も非常に研究熱心で、協力員の意見にも目線を合わせるどころか低姿勢で傾聴してください。「実るほどに頭を垂れる稲穂」が全体のカラーになっている公務員を初めて見ました。(自分も公務員でしたが…)このカラーも貴重な財産です。また、先輩協力員の方々の見識の深さを生かさなない手はありません。未来の考古学者を育てる重責を担っている、と改めて感じた研修旅行になりました。

協力員 芹沢 昇

「太田天神山古墳・全長210m東日本最大の前方後円墳」考古博物館の展示室のパネルに紹介されているので名前だけは知っていた。しかし行ったことはなかったのが楽しみにしていた。天気も良く大勢の参加者でバスの中は古墳の話題で盛り上がっていた。また保坂課長による古墳の説明もとてもわかりやすく、気分は古墳時代にタイムスリップしていた。昼食会場の窓から山が望めたが、果たしてあれが天神山古墳では…広大な坂東平野に静かにたたずむ古墳…当時の技術でどうしてこれだけ巨大な、まさに山のような古墳が造られたのだろうか…周囲の濠の土だけでこの人工の山が造られたのか…この古墳ではどのような祭礼が行われたのだろうか…誰がここに埋葬されているのだろうか…実際に古墳に登ってもそれらの謎は解けることはなく、さらに古墳へのロマンが沸いてくる。甲斐銚子塚古墳のように整備された古墳、森將軍塚古墳のように造られた当時の姿を再現した古墳、そして天神山古墳のように今はうっそうとした木々で森のようになった古墳…どの古墳にもそれぞれ趣がある。ますます俄か考古学者を自称する、気分だけはとくに古墳人の私の古墳探訪ツアーに熱が加わりそうである。

協力員 土屋 常子

群馬の歴史博物館と隣の近代美術館の埴輪の展示の量の多さにびっくりしたり感激したりでした。

群馬には1万基の古墳があったと言われていて埴輪は日本一の量があったということを知りました。群馬の物はもちろんヤマト政権の埴輪など展示されている量は300点もあり、武人埴輪、かわいい顔の男の人の埴輪、馬に乗った盛装の男の人など珍しい埴輪ばかりで一体一体ゆっくり見ていると一日以上もかかりそうでした。博物館の開館30周年記念展の第一日目に見学出来るように計画を頂き楽しい一日でした。又知らない所に行けるのを楽しみにしています。

協力員 手塚 理恵

毎回楽しみにしている協力会研修…今回は、群馬を近くに感じながら、古墳と埴輪に「古代へのいざない」を、十分に満喫できた研修でした。

太田天神山古墳では、墳丘部に上ると、樹木からの木漏れ日が印象的で一瞬の静寂に、精霊が宿っているかのような森の神秘を感じました。

古墳時代全盛期を思わせる程に、埴輪や副葬品が一同に居並ぶ群馬県立歴史博物館…個性的な埴輪の表情や姿勢、そして美しい副葬品に魅せられると共に、それらを製作した人々が御霊へ寄り添う心を感じながら、盛大で荘厳な葬送の儀式を想い描いていました。

黄泉の国への旅立ち、肉体が現世との別れとするならば、魂は黄泉がえり現世に留まり守り神として、復活を願う民の心が、埴輪の豊かな表情に込められているようにも思いました。

大きな時の流れに繋がってきた人々が、御霊に対する様々な鎮魂と再生を学ぶことができたとても有意義な研修でした。

研修を計画された保坂先生(ランチ、美味しかったです!)上野さん、そして、ご一緒できた協力員の方々に感謝いたします!ありがとうございました。

「古代の故郷にタイムスリップ」 協力員 野口 正樹

目の前にそれは巨躯を横たえていた。

全身にうっそうとした樹木をまとい足元には落葉が分厚く堆積し、神さびた雰囲気を漂わせ、見る者の前に威厳をもって立ちはだかり、畏敬の念さへ抱かせる。

圧倒的な存在——太田天神山古墳。

古墳時代全期を通じて東日本最大の大古墳の前にやっと立った。

やっと、というのは数年前、協力会県外宿泊研修先に選定しながら参加者数不足で実現しなかった経緯があるからだ。無念の涙を呑んだのは私ばかりではなかったろう。

私は群馬生まれである。が、群馬に住んでいた若い頃は勿論、最近までその存在はおろか名前すら知らなかった。

群馬県には地元の地誌・文物・人物などを読み込んだ「上毛かるた」がある。県人はみな子供の頃から慣れ親しみ語り聞かされているのである。私もかれこれ60年近くかるたをしていないが今でも記憶は鮮明で、「お」と一言いえばその札はすらすら言える。

で、「お」の札は「太田金山子育て呑竜」であって「太田天神山古墳」ではないのだ。だからクリクリ坊主頭の少年が古墳の「こ」の字も知らないのも無理からぬところである。

故郷を離れ、豊富だった頭髪が少年期のクリクリ坊主に近い状態に進化(退化か?)した定年後に考古学に関わるようになり、その存在を知るに及んで俄然私の興味は天神山古墳に傾いていった。

ところで、我が同郷の偉人・有名人を御存知だろうか？(不肖、野口以外で)

南朝の名将・新田義貞、剣聖・新陰流々祖上泉伊勢守信綱、徳川家康の遠い祖先・世良田氏、義賊・国定の忠治、幕末の英傑・小栗上野介忠順、文豪・田山花袋、日本の政治をリードする(した)中曾根康弘、福田康夫、小淵優子、タレント・井森美幸等々まさに百花繚乱、各界の錚錚たる人物が名を連ねる。

1,600年もの間ここに眠り続ける古墳の主は一体誰なのか？中央から派遣された支配者でなければこの人物は間違いなくお国訛りの「べえべえ言葉」を話し、前述の人々も影が薄くなるほどの郷土の英雄筆頭であろう。

ひょっとして私のご先祖様かも？ま、それはないだろうが、古墳を前にして私の空想はどんどんふくらんだ。

古墳に話し掛けても古墳は黙して語らず、ただひっそりと静まりかえっていた。私の気分は古墳時代にタイムスリップ、そこだけ1,600年前の空気が漂っているような気がした。

歴史博物館では、山梨では見ることのない形象埴輪の数々に逢うことができた。特に間近に見る国宝挂甲武人像はそのリアルさ、その存在感にあらためて古代の工人の技に驚嘆の思いだった。そして、古代の我が故郷に息づいていた高度の文化に触れ、同郷人の息吹を感じ、彼らのエネルギーに思いを馳せて立ち去り難かったが、後ろ髪を引かれる思いで帰路に着いた。



協力員 野呂 忠敏

畑の中の天神山古墳は、所々崩れていて時間の経過を感じました。復元保存しないのも自然でよいのかも知れませんが、石棺の一部が露出しているようですが、見つけれなかったのが残念！

太田天神山古墳

すばらしい埴輪に出会って 協力員 深沢 俊雄

平成21年度の県外研修の主目的は国指定史跡の天神山古墳のつもりでいたものが、思いがけず群馬県立歴史博物館で素晴らしい出会いを体験した。

それは国宝「武人ハニワ、群馬に帰る～これが最後、東と西の埴輪大集合～」と銘打った開館30周年記念展が開催されていて、見学できたことである。

学校の教科書やいろいろな資料・写真などでしか見たことのなかったものを、実物で拝見できる機会はめったにあるものではない。

しかも、東西の素晴らしい埴輪が揃っていて、ますます太古への夢がふくらむ思いのした研修であった。この研修を企画していただいた事務局の皆さんに、感謝・感謝の今回の研修でした。

❀ 平成21・22年度山梨県立考古博物館協力員に69名が委嘱されました ❀

平成21年4月19日土曜日、考古博物館にて考古博物館、武井輝幸館長より平成21・22年度の考古博物館協力員69名の方に委嘱状の交付がありました。委嘱式に出席された方にひとりずつ委嘱状が渡されました。前年度より継続された協力員の方、55名、新規の方、14名で活動がスタートしました。



委嘱状交付式

❀ 協力員10年の方を表彰 ❀

平成20年度に引き続き、平成21年度考古博物館協力会総会(平成21年4月19日)の中で考古博物館協力員を10年務めた方に長年にわたるご協力の感謝の気持ちとして武井輝幸館長より感謝状と記念品の贈呈がありました。

□表彰者：一瀬順司さん、深沢俊雄さん、権守光子さん

表彰者の方に10年の想いを書いていただきました。

父との思い出の場所

協力員 一瀬 順司

考古博物館の協力員になって、早10年以上が経ちました。私が協力員になったのは、亡くなった父(弥与蔵)が協力員をやっていたからです。父が亡くなり早10年経ちました。父は平成11年の4月に協力員になりました。父は当時、県立美術館の協力員をやっていましたが当時考古博物館に勤めていた家の近所に住む一瀬総務課長に勧められて考古博物館の協力員になりました。

父は一生懸命協力員をやっていました。今でも思い出すのは、父が風土記の丘こども祭りを終えて家に帰った時です。家に入ってくるなり、とても焦臭かったにおいでいっぱいでした。私が父に「親父、今日は何をしたんだ。」と尋ねると、「今日は新津課長と縄文スープを作ったんだよ。」と父は答えました。私はまだこども祭りで、縄文スープを作ったことはありません。是非作ってみたいです。父はその年の5月29日に亡くなりました。ある日私が仕事で、考古博物館を訪れた時に新津課長にお逢いして、課長から「父の後を引き継いで協力員にどうかな。」と言われました。私はその場で協力員をやる事をご返事をしました。私は学生時代から、日本史が好きでしたが、考古学は始めてでした。考古学は奥が深いので、知らない事がいっぱいです。勉強をしていきたいと思います。考古博物館は父との思い出がいっぱいの場所です。これからも皆様の足を引っ張らないように協力員として、頑張っていきたいと思います。宜しくお願い致します。



10年を振り返って

協力員 深沢 俊雄

定年退職を目前にして、偶然新聞に掲載されていた県立考古博物館の協力員の募集案内を見て応募し、仲間に入れていただきました。

興味はあったものの、仕事に追われ勉強らしい勉強もしてこなかったために、協力会に加入していろいろと教えてもらうまでは、山梨にこれほど素晴らしい縄文文化があることを、まったく知らず愕然としたものです。

県内で発掘された埋蔵文化財が展示された館内や、風土記の丘の遺跡についても、私がそうだったようにまだまだ県民の中には知らない人が多いのではないのでしょうか。

昨年の春、ある会のメンバー15名を誘って館内や風土記の丘を案内したときも、「こんなに良いところが県内にあったのか、今度は家族を連れて是非来たい」と口々に言うのを聞いて、今後も職員や仲間の協力員にご指導をお願いしながら、もう少し協力員として頑張ってみたいと思っています。

✿ 平成21年度県内研修 山梨県立博物館・景德院・栖雲寺 ✿



アンコールワット展観覧



栖雲寺「伝燈庵」にて

研修地 ①山梨県立博物館(笛吹市) ②景德院(甲州市大和町) ③栖雲寺(甲州市大和町)

県内研修を平成22年3月6日土曜日、協力員23名の参加のもとに行いました。

最初の山梨県立博物館では企画展「世界遺産 アンコールワット展－アジアの世界に咲いた神々の宇宙－」を観覧しました。参加された協力員の方々は発掘された仏像など神々の顔を見て心が穏やかになったり、その精巧な作りを見て感心もしたようでした。

その後の2つの寺院では、山梨県埋蔵文化財センター所長である小野正文氏を講師にお迎えして非常に興味深いお話をしていただきました。武田氏が滅亡した地として有名な景德院では山門(県指定文化財)や保存修理された「武田勝頼の墓」(県指定史跡)などを見学しました。また次に訪れた栖雲寺では、甲斐の五鐘の一つである銅鐘(県指定文化財)やさらに普段は見ることのできない保存庫「伝燈庵」(重要文化財 木造普応国師坐像をはじめとする数々の貴重な品を保管)の中や自然の地形を利用してつくられている庭園(県指定名勝)などを見学しました。

天気はあいにくの雨模様でしたが、よく歩き、それぞれの目で貴重な文化財を確かめることができ、充実した研修となりました。

✿ ミュージアムショップ運営委員会を立ち上げました ✿

考古博物館のミュージアムショップは協力会が運営しています。平成20年度末に、ショップの運営を円滑に進めるためにミュージアムショップ運営委員会を立ち上げました。運営委員会の業務内容は、商品管理や企画、販売法の説明などです。運営委員を募集したところ11名の協力員の方が名乗りをあげてくださいました。

平成21年度には8回の運営委員会を開催しました。また、商品の在庫管理や商品の陳列を考えたり、商品のプライスカード・ポップの作成、ショップで販売している「勾玉作りのキット」を作る作業など、立ち上げたばかりの運営委員会ではありましたが、様々な活動を意欲的に行っていただきました。今後どうぞよろしく願いいたします。



□平成21年度運営委員(敬称略)

雨宮千代子、一瀬順司(副委員長)、今福政江、大久保長仁、大山智恵子、杉山幸恵、曾根瑠璃子、広瀬はるみ(委員長)、藤森たか子(副委員長)、堀内淳子、山崎義雄

❀ 協力員による常設展解説(ボランティア・ガイド)を始めました ❀

平成20年度よりボランティアガイドを養成するための研修を行っていました。平成21年の6月から考古博物館協力員による常設展示の解説がいよいよ始まりました。

研修を受け、実際に来館者に解説をしてみたいという積極的な協力員さん数名に、月に1人数日ずつ(不定期)解説をしていただいております。ガイドをする方は県内外を問わず、年齢もお子さんから大人の方まで幅広い方々です。

*平成21年度6月～3月の間、のべ約67日・約75名の協力員の方に実施していただきました。

協力員の方は来館者と楽しそうに対話しながら解説をしているようです。興味を持って聞いてもらえるとう解説するほうも熱が入りつついつい解説が長くなってしまふこともあるようですが、親しみも持てるガイドさんはたいへん好評です。これからのさらなるご活躍を期待しております。



常設展の解説

❀ 平成21年度協力員さんの活動の記録 ❀

平成21年度も以下の活動・研修にご協力、ご参加いただきました。



活動

ミュージアムショップ
(平成21年4月～平成22年3月)
第21回風土記の丘こどもまつり(5月)
ボランティアガイド(6月～3月)
学校対応補助勾玉作り活動(6月～11月)
上の平遺跡出土品修復作業(8月)
こどもの城フェスタ(8月)
特別展準備・常設展復旧作業(10・12月)
特別展(10・11月)
古代のもちつき(平成22年1月)

研修

ボランティアガイド研修・実習
(6・9・12月)
春季企画展勉強会(6月)
県外研修(7月)
夏季企画展勉強会(8月)
学校対応補助勾玉作り研修(9月)
青銅鏡作り研修(9月)
特別展勉強会(10・11月)
冬季企画展勉強会(12月)
県内研修(平成22年3月)

編集後記

今回の号で掲載いたしました、7月の県外研修の研修記においては多くの方に原稿をお寄せいただきまして感謝いたします。平成21年度は新たに協力員になられた方を含め、活発に活動していただきました。またミュージアムショップ運営委員会の立ち上げ、ボランティアガイドを始めたことは大きな前進であったかと思っております。引き続きご協力をよろしくお願いいたします。(事務局)